

活気に溢れたあのころを取り戻したい

室蘭市 母恋駅を愛する会

映画やドラマでは駅を舞台に様々な人々の物語が描かれる。駅には出会いや別れがあり、人々の思いが交錯する特別の場所でもある。昭和 10 年に開業した母恋駅もそんな乗降客



小さいが趣のある母恋駅の駅舎

たちのドラマを静かに見守ってきた。

駅がある母恋は、アイヌ語の「ポクセイ・オ・イ」（ホッキ貝の沢山あるところ）に由来し、母や恋は当て字であるといわれている。同駅はその名前や、木造のどことなく哀愁を感じさせる駅舎の佇まいから全国の鉄道ファンの注目を集めている。また、最近ではホッキ貝おにぎりなどの入った手作り駅弁「母恋めし」が1日限定 15~40 食が販売され、すぐに売り切れてしまうほどの人気ぶり。さらに駅名にちなんで毎年発行している母の日の記念切符が、5月の母の日が近づくと全国各地から注文が集まり、送付依頼が殺到する

など鉄道ファン以外からも知られる存在となっている。

この駅で毎月1回、第2土曜日の午後1時30分から待合室で民謡、古典芸能、マジックなどのイベントを開催しているグループが「母恋駅を愛する会」。20年間活動を続け、2013年（平成25年）3月には200回を達成している。出演者との手作りによるイベントは、回数を重ねることによって着実に地域住民の触れ合いの場にもなっている。

■ 忘れられない駅の思い出

筆者が訪ねた11月8日の第220回イベントでは、「中居さん一家による楽しい音楽会」が行われていた。会のきまりとして、イベントが始まる前には「地球岬」「未来（あした）ヘキラキラ」を歌うのが恒例だ。この日、駆け付けた室蘭市の青山剛市長も集まった地域住民ら約30人とともに歌った。

音楽会に出演した室蘭市内に住む中居力さん、千文さん、奏ちゃん（小学1年）一家が歌やオカリナなどを披露。奏ちゃんは「翼をください」「どんぐりころころ」を歌い、力さんと千文さんは「高原列車は行く」やオリジナル曲など計15曲で参加者を楽しませた。

駅の待合室で行われているから当然、乗降客もあるし、ときおり列車の発着を知らせる

アナウンスも聞こえる。でもそれがかえって温かみを増し、このイベントにふさわしい味わいを醸し出す。乗降客も待合室で足を止めて曲を聴いたり、参加者の中には一緒に口ずさんでいたり、手拍子している人もいた。

「アンコール」の曲が終わると演奏した中居さん一家に「上手だったよ」と声をかけたり、プレゼントを渡したり、オカリナの美しい音色に相応しく終始アットホームな雰囲気に包まれていた。

ライブが終わると演奏者とともに、会のメンバーがイスや舞台の装置を片付け、元の待合室の状態に戻す。準備や片付けはすべて70代以上の高齢のメンバーが行っているのだ。代表の久保田純子さんは90歳。テキパキとした動きや会話には少しも年齢を感じさせない。久保田さんは、この会の活動のほかにもボランティア活動を行ったり、55歳から始めた日本舞踊を踊ったり、市民向け大学に通ったりするなど精力的に毎日を過ごしている。「体にムチ打ってやっているんです。この会をなんとか続けるために負けてはいられないですから」と久保田さんは笑顔で語る。

ここまで入れ込むのは久保田さんにとって母恋駅には忘れられない思い出があるからだ。

久保田さんは室蘭市生まれ。1945年（昭和20年）7月、一般人430人以上が亡くなった室蘭艦砲射撃の中、生き残った。父親は日本製鋼所で働いていたが、戦時中母親や兄弟たちを残し満州へ。病身だった母親は48歳のときに「純子頼むね」と言い残して亡くなった。このとき、久保田さんは女学校を卒業したばかりの18歳だったが、母親の

その言葉を自らの使命として親代わりとなって幼かった妹や弟が大きくなるまで面倒を見続けた。母恋駅は、そんな久保田さんの半生に絶えず寄り添うような存在だった。

中でも15歳の弟が、中学校から志願兵として出征するときに涙を流して母恋駅で見送ったことを「絶対に忘れることができない」という。その後も本州へ面会のために母恋駅から足の踏み場もないほどぎゅうぎゅう詰めの列車に乗ったこともある。その弟は無事に復員し中学校も卒業できたという。「母親代わりをした原点であり思い出の地がこの母恋駅なのです」と久保田さんは当時を振り返りながらしみじみと語る。

会のメンバーにもそれぞれの駅への思い出があるが、特に日鋼や日鉄（現・新日鉄）で働いていた人々が多く利用していたため、1日の乗降客が8000人という賑わった当時の記憶が忘れられないそうだ。

利用客が減り、寂れゆく駅と町の状況を見かねて、「賑わいが戻るように、ひと月に1日でもいいから笑いが起きる場所にしたい」と当時の代表が東室蘭の駅長へ嘆願書を持参、その嘆願書が駅長から札幌の本社に渡り、



ユニークな待合室での音楽会の様子。音楽に合わせて口ずさんだり手拍子したりする人も

1996年（平成8年）9月13日に許可された。それをきっかけに久保田さんを含む代表に賛同した市民らで会を結成した。

2013年に前代表が体調を壊し、やめることになったため、会の存続も危ぶまれたが、「続けたい」と久保田さんが新しい代表になった。

会員は室蘭市や室蘭にゆかりのある鹿児島県在住の20人。運営資金は年に1度会員から集める会費と市の助成金で、その中から出演者たちへのガソリン代やお茶代などが支払われる。

イベントを始めた当初は見に来る人もほとんどが会員だったが、駅に手作りのポスターを貼ったり、市の広報や地元紙の催し物欄で告知したりすることで徐々に周知されていった。全国的にみても駅舎内でこうしたイベントを開催するのは珍しいことから新聞やテレビなどメディアに取り上げられることが多く、道内外から見に訪れる人も多くなったという。時には前述したように市長が見に来ることもある。

■ 好評博した200回記念イベント

イベントは1年の初めに12回の内容を決めるが、出演者がその日に都合が悪くなったり、「ぜひ参加したい」と問い合わせがあったりした場合には、内容を変更することもある。

これまで、一人芝居や童謡の合唱、交通安全教室や室蘭艦砲射撃を忘れないようにと平和の紙芝居など各分野の出演者が来場者を楽しませてきた。「社会を明るくする運動のお話」は毎年実施しており、2014年には国民が、

犯罪などを犯した人たちの更正について理解



“社会を明るくする運動”に貢献したとして法務大臣から贈呈された感謝状を手にする代表の久保田純子さん

を深め、犯罪や非行のない明るい社会を築くことを目的とした“社会を明るくする運動”に貢献したとして、法務大臣から感謝状が贈呈されている。

好評だったのは着物ショー。着物の専門学校の生徒が和服姿で登場したり、着物や帯の素材の解説、日常的なマナーをクイズ形式で紹介したりした。また、煎茶のたて方を教え、参加者全員に振舞ったイベントでは、「抹茶のたて方を教わることはあるけれど、煎茶は珍しい」とこちらでも好評を博した。

200回の記念イベントの際には、日本舞踊の正派若柳流若樹会師範の實松千恵子さんと、名取りである久保田さんが、舞を披露し、集まった80人以上もの人がその舞に魅了された。大勢の来場者とともに新聞社が4社取材に訪れたことは、この会が地元住民にとってかかせない存在となっていることを物語っている。

駅のファンは、地元住民や鉄道ファンだけでなく著名人にもおり、ネーミングが気に入ってテレビ番組の収録で偶然駅を訪れた俳優

の阿藤快が会に参加し、その模様がテレビ放映され「こんないいネーミングはないし、いい駅なんだからもっとPRしたほうがいい」といわれ、会員の励みになったという。

■ 駅周辺エリアの活性化にも一役買う

活動はイベントを開催するだけでなく、駅舎を、乗客をもてなすような環境にしたり、PRしたりすることによって周辺の活性化にも一役買っている。

駅の出入り口横とホームの花壇にペチュニアやパンジーなどを植え、水やりや雑草取りなどをする活動も行っている。JR北海道が駅や駅周辺を花で飾り、利用者をもてなすために付近の住民や団体に「花の駅長さん」として委嘱、花壇の手入れなどの作業に当たってもらう内容のキャンペーンを始め、同会が母恋駅の担当を委嘱されたことから始まったものだ。

2012年5月には、「恋」という字がつく全国4カ所の鉄道会社が連携して各エリアの活性化を目指す「恋駅プロジェクト」の第1回ミーティングが登別市で開かれ、同会のメンバーも参加した。各社が日ごろの取り組みを紹介する中、久保田さんも当時の代表と共に副代表としてイベントを継続していることなどをPRした。ちなみに国内に恋とつく駅は4つしかなく、同駅のほかに西武鉄道の「恋ヶ窪駅」（東京都国分寺市戸倉）、三陸鉄道の「恋し浜駅」（岩手県大船渡市三陸町）、智頭急行の「恋山形駅」（鳥取県八頭郡智頭町）があり、連携事業として4つの駅の切符をそれぞれ特徴ある台紙に収めた「日本に4つ恋の駅きっぷ」が限定発売されている。

会は200回を超え、久保田さんは気持ちを新たに「吹雪でも台風の日でも1度も中止することなく、よくここまで続けることができたと思います。見に来てくださったり、手伝いにきてくださったりした方々のおかげです。自分の体が許す限り続けたい。そのためにも特に若い方々に会員になって欲しいですね」と語った。

最後に「母恋駅は久保田さんにとってどんな存在か？」と尋ねるとこんな言葉が返ってきた。

「母恋駅を見るとつい母を思い出してしまいます。当時としては珍しく女学校にも通わせてもらったり、教育熱心で活動的な面もあった母でした。その母がずっと見守ってくれているように感じます。母恋駅は私の生きがいなんです」

■ 連絡先

〒051-0005
室蘭市新富町1-2-22
ケアハウスふれあい母恋202

代表 久保田 純子（くぼた すみこ）

TEL 090-8636-1960